
はじめに

本報告集は、愛知大学 21 世紀 COE プログラム国際中国学研究センターの学際的研究活動の一環として、2006 年 7 月 15 日・16 日、二日間にわたり、愛知大学車道校舎で開催した国際シンポジウム『漢族・少数民族研究の接合～クロスオーバー的視点からみる漢族と少数民族の社会と文化～』の成果である。

このシンポジウムは、当初、日本における文化人類学的なディシプリンによって行われてきた中国研究において、従来の分野別、地域別あるいは民族別に行われてきた漢民族研究、少数民族研究の分業体制を見直し、今後の中国研究の向かうべき方向性を見据え、新たな問題提起を行うものとして設定された。多くの研究者が一堂に会し、報告者やコメンテーターとして、自由闊達な議論を展開できたことにより、所期の目的をはるかに超えた成果を得られたのではないかと内心自負している。

本シンポジウムの参加者は、各自のフィールド・ワークの経験や成果に基づき、それぞれの民族や地域の社会、文化について報告し、議論を交わしたが、今後の中国研究の向かうべき方向性を見据えて、新たな問題提起、あるいは方法論にまで話が及んだ。論点をおおまかに整理すると、下記のようにまとめられる。

- i. 政治的に構築されてきた民族（漢民族や少数民族、マイノリティ＝弱勢群体、あるいは「族群」やエスニシティなど）という概念について、よりリアルに、あるいは脱構築的に解釈できるようにする視点
- ii. 従来の細分化された地域研究や少数民族研究、漢民族研究といったジャンルを打ち破るというよりは、むしろ広い視野に立って、クロスオーバー的な対話（南と北、東と西、中心と周辺）を行う必要性
- iii. 異なる領域分野（文化人類学や歴史学や政治学）とのクロスオーバー的対話の必要性
- iv. 中国の多様性を説明するには、共通のプラットフォームが必要だという課題
- v. 「漢化」や「華化」に関する新たな議論の必要性

これまで、日本における文化人類学的な中国研究では、クロスオーバー的視点に立った議論が完全になかったわけではないが、今回のような多分野にわたって大規模に展開された議論は例を見ない。その意味では、本報告書を一読していただければ、きっと有意義な議論と問題提起を発見できると確信する。

本報告集は、「報告篇」と「資料篇」によって構成されている。「報告篇」は、シンポジウムの開催当日、各セッションの報告、コメントおよび自由討論を録音し、その後記録テープを起こして編集したものである。「資料篇」は、当初、参加予定だったが、海外調査などの事情で参加できなかった 2 名の方のペーパーおよびコメンテーターが予め用意したコメント文を収録している。

また、本報告集に収録されているすべての内容は、クロスオーバー的視点に立ったものかどうか、検討の必要はあるが、「磚を投げて玉をひき寄せる」（日本の「海老で鯛を釣る」に相当）という極めて純粋な動機で企画したものであり、日本における中国研究にとって、いささかなりとも貢献できたとすれば、企画者としてはこの上ない喜びである。

最後に、本シンポジウムの参加者全員に感謝の意を表したい。本シンポジウムの企画から開催までの期間が極めて短く（2006 年度 3 月中旬に企画が始まり、7 月中旬に開催）、報告やコメントの時間配分が企画途中で変わり、それについての企画者側からの説明に不十分なところがあったため、参加者の方々をかなり戸惑わせてしまったことと思う。参加者の方々の多大なご理解とご協力がなければ、このような成果を挙げることはできなかったであろう。中国研究を推し進めていくうえで、このようなクロスオーバー的な研究協力体制は今後ますます重要になっていくであろう。今後とも宜しくお願い申し上げる次第である。

愛知大学国際中国学研究センター (ICCS)
事業推進委員・本シンポジウム企画担当
高 明 潔